



チャイニーズティーマスター 小田純也による世界中国茶紀行

Vol.17 四川省 峨眉山の竹葉青

写真上は、中国四川省の峨眉山(がびさん)を訪れると最初に出迎えてくれる巨大な「樂山大仏(らくさんだいぶつ)」です。1996年にユネスコより世界複合遺産に登録されました。

樂山大仏は、高さ71m、座高28m、頭部だけでも14.7m、耳は7mもあり、その巨大さに圧倒されます。唐の時代(613-907)に90年間(713~803)かけて、一つの岩山を掘って建立された弥勒菩薩像(みろくぼさつぞう)で、摩崖仏(まがいぶつ)としては世界最大です。(摩崖仏とは…崖にある石や岩に仏像を彫ったもの)



今回のテーマは峨眉山を舞台に、この地で生まれた銘茶「竹葉青(ちくようせい)」をご紹介します。

中国茶の歴史は遥か紀元前。中国大陸は広大で気候も様々です。お茶を通じて、その土地の文化や歴史を学ぶことは素晴らしいことだと思います。

樂山大仏が建つ場所は3本の川の合流点に位置しています。船が幾度となく転覆したことから、船が転覆するのは川にいる化け物のせいだと考えられていました。そこで弥勒菩薩像(みろくぼさつぞう)を建立することになりました。

(水の勢いが強くなる3本の川の合流点に、削った岩石を沈めることで水の流れが変わり改善されたと伝わる)

樂山大仏は周囲を川に囲まれているため、遊覧船で近くから全貌を見ることができる人気の観光スポット。私のお勧めは、小さなボートを選んでエンジン音と波しぶきを感じながら、壮大な樂山大仏を下から望むと臨場感ともに迫力満点！(樂山大仏の内部には雨水を流す水路があり風化を抑える造り。当時の技術の高さが現代に伝わる)



仙境の地 峨眉山をゆく

楽山大仏とともに 1996 年に世界複合遺産に登録された峨眉山。峨眉山は四川省の省都、成都から約 170km 程の距離に位置しています。

峨眉山は四川省の西南にそびえ立ち、中国四大仏教名山(※)の一つで、山中の数ある寺院は多くの信仰を集めてきました。

【(※)四川省の峨眉山、浙江省の普陀山、安徽省の九華山、山西省の五台山】

今からおよそ 2 千年前、インドから現在の中国西南地方(雲南省・四川省)に仏教が伝わり、楽山、峨眉山に伝来しました。修行僧は峨眉山に登り、東晋時代(隆安年間 397 年-401 年)に初めての仏教寺院 万年寺(=写真右)が築られました。現代、峨眉山には 26 の寺院があります。



写真左は万年寺の無梁殿。建物には柱も梁もありません。古インド式の「天は丸く、地は四角い」建築法。この建物の中に重要文化財として指定されている高さ 7.3m、重量 62 トンの普賢菩薩像があります。さらに天井に目をやると 307 体もの金色の普賢菩薩像が並べられています。

…と、そこで疑問。6 本の牙の白い象に乗る、62 トンもの普賢菩薩像を、一体どのようにして山奥の万年寺まで運び入れたのでしょうか！？これについては今も謎のままのようです。(仏教の聖地の峨眉山は外界との関わりが少なかったため、珍しい植物や絶滅危惧種の動物がいる自然景勝地でもある)

峨眉山で生まれた銘優緑茶、竹葉青

「竹葉青」は 1964 年に正式に誕生しました。元々は僧侶が作っていたお茶で名前のないお茶でした。中国では昔から寺とお茶の結び付きが強く、寺の側には茶樹があることが多いです。



峨眉山を訪れた際に聞いた話によると、竹葉青は浙江省の杭州の銘茶「龍井茶(ろんじんちゃ)」から学び作られていたそうで、地元では「峨眉山の龍井茶のようなお茶」と呼ばれていたそう。

正式に誕生した背景には、次のようなエピソードがあります。



軍人で政治家で外交官でもあった陳毅元帥(1901-1972)が、峨眉山を訪れた時のこと。峨眉山の万年寺を訪問した際、その時に出されたお茶の香りがとても清らかで甘く、大変気に入ったため、お茶の名を尋ねてみました。ところが、当時は“地元のお茶”というだけで特に名前がなかったそう。そこで陳毅元帥が青々と綺麗な竹の葉のような茶葉の形から「竹葉青はどうか」と提案し、今もその名前が使われているのだそうです。

竹葉青を飲む時は 80℃前後のお湯で淹れると適しています。清々しい緑茶の良さを最大限に引き出して、ゆっくりと味わうことをお勧めします。陶器の急須で淹れるよりは、磁器製やガラス製の蓋碗(=道具)で淹れる方が好ましいでしょう。



峨眉山には竹葉青を美味しく飲む茶道があります。それは中国三大武術の一つである峨眉山発祥の「峨眉派」から誕生した武術と茶道を組み合わせた茶藝です。

18種類の峨眉武術の型が組み込まれていて、鮮やかな身のこなしで「長流壺」という1.2mもある細長い注ぎ口が特徴の急須を巧みに操りながら、アクロバティックな動きで次々とお茶を淹れます。

お湯はこの長い注ぎ口を通過する過程で適温の80℃前後にまで下がるというから驚きです。パフォーマンスを見ているだけでも楽しくなり、竹葉青をさらに美味しく味わうことができます。

(中国三大武術とは…峨眉派、少林派、武当派)

撮影 小田純也